

7. 暫間的間接歯髄覆罩法（I.P.C.）の歯髄に及ぼす 影響に関する臨床病理学的研究

後藤 譲治，○古豊 泰彦，中村 友美，間宮ゆかる
(長大・歯・小児)

生活歯髄は極力保存すべきであるという歯髄保護の観点から、特に歯根未完成の幼若永久歯においては、生活歯髄を保護し、可級的歯髄組織に侵襲を加えないことが得策であると考えられる。

齲蝕が極めて歯髄に接近している深部齲蝕の処置に当って、露髓の恐れのある部分の罹患象牙質を全て除去することなく、意図的に一部これを残留させ、一定期間後再度処置を行うことによって、歯髄組織を露出させ損傷を及ぼすことなく保存する方法に、暫間的間接歯髄覆罩法（Indirect Pulp Capping. I.P.C.）がある。

本邦においては、暫間的間接歯髄覆罩法に関する研究は極めて少なく、特に人間歯牙を用いた病理組織学的検討は皆無の状態にある。そこで、深部齲蝕を有する人間永久歯並びに幼若永久歯に対して、暫間的間接歯髄覆罩法を施し、臨床病理学的に検索した。

実験に供したのは、深部齲蝕を有する人間幼若永久歯及び第3大臼歯、計10歯である。これらの歯牙に対して、局所麻酔後ラバーダム防湿下に齲窩を開拓し、軟化象牙質の除去を行った。この際、歯髄に極めて接近していると思われる部分の罹患象牙質は、全て徹底的に除去することなく一部残留させたまま、間接歯髄覆罩剤として水酸化カルシウム製剤あるいは酸化亜鉛ユージノールセメントを用い、アマルガムで窩洞を閉鎖した。そして術後臨床的に観察を行い一定期間経過後、病理組織標本を調製し顕微鏡下に観察を行った。その結果、若干の興味ある知見を得たので報告する。